

「ケア」のない産科施設がまだある

敦賀陽子

前・市立芦屋病院勤務助産婦

先日私は、嫁の出産場所で思いがけない体験をしたので、ここにそのあらましを述べて読者の皆様と一緒に考えてみたいと思う。

その施設は設備の整った、開設してまだ10年もたたない新しい総合病院だった。ところが医療や看護内容は、まるで20~30年前にタイムスリップした印象さえ受けたのである。まず、患者や家族に対する医師の説明が極端に少ないのである。

今回嫁は反復帝王切であったが、手術の説明は当日の朝本人と夫に対して行なわれただけで、その後は皆無だった。術後数日して説明もなく造血剤の注射が開始されたが、術中に800ml近い出血があったことは、退院後に母子手帳の記録から知ったのである。術前・術後、出血の原因を知らされることはなかった。

ベビーは2322gの未熟児であったが、子宮や胎盤に原因となる要素があったのかなかったのかも説明されず、顔見知りの助産婦から臍帯が卵膜付着であったことを聞かされたのみであった。

小児科医に至っては、出生当日に1度ベビーの父親である私の息子に対し「未熟児なので体重が2500gにならないと退院できない」との簡単な説明がなされただけであった。毎日変化する状態や検査、治療内容などをせめて2日に1回でも母親に聞かせてやれば、母子分離されている不安を募らせている母親にとって、どんなに安心か知らない訳ではないだろうが、とにかく訪床すら1度もなかった

のである。わが子よりも先に退院することになった母親が、たまりかねて小児科医との面談を希望したが、「説明は先日父親にしているから」と言って断られてしまった。インフォームド・コンセントが叫ばれて久しいが、話もしない、尋ねたことにも答えないという何とも尊大で権威の象徴のような医師が存在するという現実には、私はただ啞然とした。

看護面でも、たとえば患者が何かを訴えたとする。すると「聞いていないから」とか「確認します」とかで放置され、3日間言い続けてやっと対応してもらえたという有様である。聞くところによると、分娩件数は月に平均30~40例で助産婦も10名勤務しているが、その内容はというと、月数回だけとか週1回の当直だけとか、週3日の日勤だけとかのパート勤務者が大半を占めているとか、当然助産婦は不足

で、乳房マッサージなどの産婦ケアはいうまでもなく、分娩介助すら医師の立ち合いの元でナースが行なっていると聞かされ、その上、勤務する助産婦が上司に抗議し対策を頼んだが「これがこの方針です」と一蹴されたと聞いたとき、私はこの病院の医療レベルが想像できた。

医療レベルという表現が不都合なら、ここでは「患者は不在」なのだと悟ったのである。

施設で働く者の一人ひとりがまず相手の身になって考えるという「謙虚な心」を失ってしまったとき、このような見せかけだけの病院になってしまうのではないだろうか。

